

# 患者の皆様へ

2016年11月14日

婦人科

現在、婦人科では、「卵巣明細胞腺癌の発生機序と予後の解明」に関する研究を行っています。今後の治療に役立てることを目的に、この研究では卵巣癌の患者さんの診療情報などを利用して頂きます。診療情報などがこの研究で何のために、どのように使われているのかについて詳しく知りたい方は、下記の窓口にご連絡ください。

## 1. 研究課題名 「卵巣明細胞腺癌の発生機序と予後の解明」

## 2. 研究の意義・目的

本邦での卵巣明細胞腺癌は欧米に比し頻度が高く、近年増加傾向にあります。また、生殖医学の発達および結婚の晩婚化のため不妊症が増加傾向にあり、不妊治療中に発見される明細胞腺癌も散見されるようになってきました。一般的には卵巣明細胞腺癌は予後不良であり、卵巣がんガイドラインにおいてはたとえI期であっても妊孕性温存の対象とならず、根治術と抗がん剤治療が必要とされています。しかし、生殖可能な年齢の卵巣癌者が増加してくると、妊孕性温存術を考慮する必要性が社会的には高まってくると考えられます。

妊孕性温存術を考慮する際にまず検討しなくてはならないことは、縮小手術をおこなってもその治療成績および予後が下がらないグループの抽出することです。現在まで知られている卵巣明細胞腺癌における予後因子は、進行期その他、腹水細胞診および腫瘍の被膜破綻等が考えられていますが、子宮内膜症の有無、病理学的特徴、糖鎖抗原の発現の有無、遺伝子変異等と予後との関連は現在のところはっきりしていません。今回われわれは、多施設共同研究にて多数の症例を集積し、予後に関連する因子を解明することを目的としています。

### 3. 研究の方法

千葉大学医学部附属病院婦人科および関連病院の10施設において2000年1月～2007年12月に治療された卵巣癌の手術で摘出した癌検体の凍結保存検体あるいはパラフィンブロック検体を対象に、シアリルLeグループ（シアリルルイスグループ）の糖鎖抗原であるCA19-9の発現の有無を免疫染色にて検討します。また、内膜症と関連する卵巣癌の約半数に変異があると近年報告されたARID1A（AT rich interactive domain 1A gene）をコードするBAF250aの発現低下の有無を免疫染色にて検討します。また、明細胞腺癌以外には変異がみられないと近年報告されたTERT（telomerase reverse transcriptase）などの体細胞遺伝子変異について解析を行い、その後は他の候補遺伝子について解析を行う予定です。免疫染色の結果および体細胞遺伝子変異と無病生存期間、全生存期間との相関について解析を行い、予後良好な群を検討します。

### 4. 個人情報の取り扱いについて

本研究で得られた個人情報は、外部に洩れることのないように厳重に管理します。研究成果の発表にあたっては、患者さんの氏名などは一切公表しないこととします。データ等は、千葉大学大学院医学研究院生殖医学教室の鍵のかかる棚で保管します。

### 5. 研究に診療情報などを利用して欲しくない場合について

ご協力頂けない場合には、原則として結果の公開前であれば情報の削除などの対応をしますので、下記の窓口にご遠慮なくお申し出ください。

文部科学省、厚生労働省が定める「疫学研究に関する倫理指針」（平成20年12月1日一部改正）に基づいて掲示を行っています。

**研究実施機関** : 千葉大学医学部附属病院婦人科

**本件のお問合せ先** : 医学部附属病院婦人科

**医師 錦見恭子**

**043（222）7171 内線72646**